

令和5年度全国学力・学習状況調査 小田原市の結果について

小田原市教育委員会

目次

1 はじめに

2 調査の概要

- (1) 調査の目的
- (2) 調査の方式
- (3) 調査の実施日および調査の対象
- (4) 調査の内容
- (5) 調査結果の見方
- (6) 本市の基本的な考え

3 教科に関する調査結果

- (1) 令和5年度 各教科の平均正答率一覧
- (2) 教科に関する調査について【小学校】
 - ①直近4回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③算数について
- (3) 教科に関する調査について【中学校】
 - ①直近4回の平均正答率の経年変化
 - ②国語について
 - ③数学について
 - ④英語について

4 質問紙に関する調査結果

- (1) 教育活動の取組状況に関わる項目について
- (2) 教育環境に関わる項目について

1 はじめに

令和5年4月に実施された「令和5年度 全国学力・学習状況調査」の本市の調査結果の概要についてお知らせします。本市の調査結果及び課題等を公表することにより、学校・家庭・地域がより一層の連携をし、本調査から見える児童生徒の学力や学習状況から学習指導の改善に努めていきます。

また、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であることや、学校における教育活動の一側面であることを踏まえ、結果については、序列化や過度な競争につながらないように十分配慮して取り扱う必要があります。従って、本内容を活用の際にはこの趣旨を十分ご理解いただき、適切な取扱いをされますようお願いいたします。

2 調査の概要

(1) 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の方式

悉皆調査

参考	年度	調査方式	調査科目
	平成 19～21 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 22 年度	抽出調査	国語、算数・数学
	平成 24 年度	抽出調査	国語、算数・数学、理科
	平成 25・26 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 27 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	平成 28・29 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	平成 30 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	平成 31 年度 (令和元年度)	悉皆調査	国語、算数・数学、 英語 (中学校のみ)
	令和 3 年度	悉皆調査	国語、算数・数学
	令和 4 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、理科
	令和 5 年度	悉皆調査	国語、算数・数学、 英語 (中学校のみ)

※ 平成 23 年度は東日本大震災のため予定していた抽出調査を中止
※ 令和 2 年度は新型コロナウイルスのため悉皆調査を中止

(3) 調査の実施日および調査の対象

令和5年4月18日(火)

- ・小学校第6学年(市内25校、約1,420名)
- ・中学校第3学年(市内11校、約1,250名)

(4) 調査の内容

- ① 教科に関する調査
 - ・小学校・・・国語、算数、
 - ・中学校・・・国語、数学、英語
- ② 質問紙調査
 - ・児童生徒に対する調査
 - ・学校に対する調査

(5) 調査結果の見方

本調査の結果で示されている平均正答率については、文部科学省の考え方に準じて整理している。

「全国学力・学習状況調査 報告書」(国立教育政策研究所)では「平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない」としており、小田原市でも「平均正答率の±10%」を目安として調査結果を整理した。

(参考)

各都道府県・指定都市(公立)の状況については、平均正答率を見ると、全ての都道府県・指定都市が**平均正答率の±10%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

出典:「令和5年度 全国学力・学習状況調査 報告書」(令和5年8月 国立教育政策研究所)

(6) 本市の基本的な考え

小田原市教育委員会では、「令和5年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」に基づき、本調査の結果について次のような考えを基本としている。

本調査で測定できるのは「学力の特定の一部」であり、地域性や家庭環境等による影響も受けるものと認識しているが、調査問題は、学習指導要領の目標・内容等に基づいて作成されたものであり、その結果は、**児童生徒の学力の一側面を示す客観的な資料**である。

3 教科に関する調査結果

(1) 令和5年度 各教科の平均正答率一覧(単位は%)

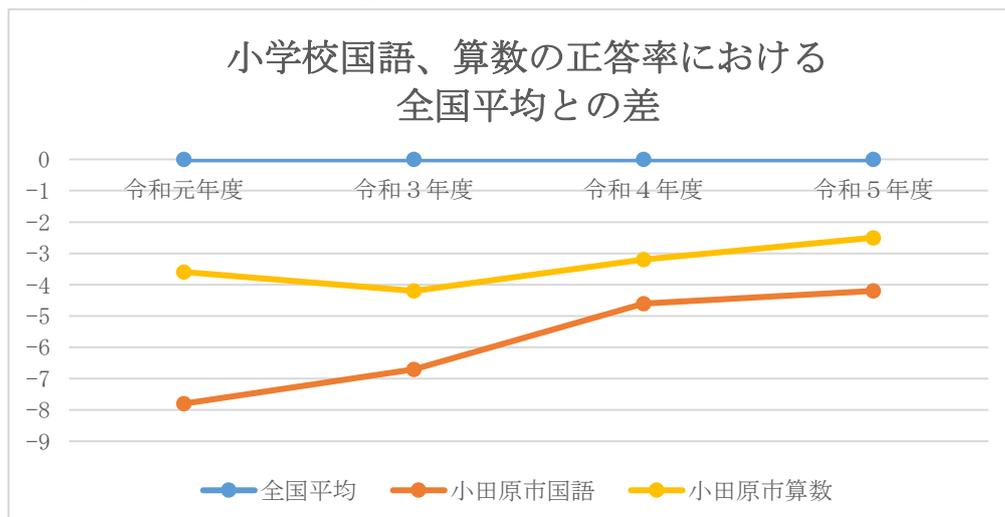
	教科	小田原市	神奈川県	全国
小学校	国語	63	66	67.2
	算数	60	63	62.5
中学校	国語	66	70	69.8
	数学	47	52	51.0
	英語	43	50	45.6

※市や県の正答率は整数表示

- 小田原市の平均正答率は、全教科で「全国平均正答率±10%」の範囲内に含まれており、**全国との大きな差は見られない。**

(2) 教科に関する調査について【小学校】

①直近4回の平均正答率の経年変化



小学校調査では、国語、算数ともに**全国平均との差が縮まり、学力の向上が図られていることがわかる。**

②国語について

令和4年度は、言葉についての知識及び技能を問う設問での正答率が、全国の平均正答率との差が大きく課題となっていた。**今年度は、全国平均との差が縮まり、知識及び技能に関する一定の定着がみられる。**

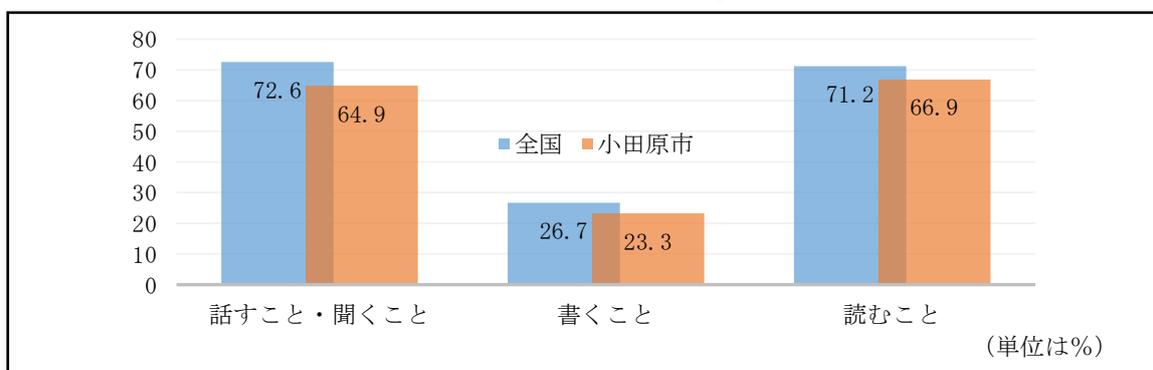
＜小学校国語「知識及び技能に関する事項」における全国平均正答率との差＞（単位は％）

知識・技能	令和3年度	令和4年度	令和5年度
言語の特徴や使い方に関する事項	-8.3	-6.8	-3.8
我が国の言語文化に関する事項	—	-8.7	—
情報の扱い方に関する事項	—	—	-0.7

※例年言語に関して2つの内容事項について調査

今回の調査で特に全国平均正答率と差が大きかったのは、学習指導要領の内容の「思考力、判断力、表現力等」の項目のうち、「話すこと・聞くこと」の区分である。

＜小学校国語「思考力、判断力、表現力等に関する事項」における全国平均正答率＞



「話すこと・聞くこと」の問題では、3つ目の「話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる」問題の正答率が特に低い。

<小学校国語「話すこと・聞くこと」の問題と正答率> (単位は%)

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	【インタビューの様子】の傍線部ア(～ということだと思いますが、合っていますか。)のように質問をした理由として適切なものを選択する	必要なことを質問しながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいこととの中心を捉えることができるかどうかをみる	68.0	-5.6
2	【インタビューの様子】の傍線部イ(～というのは、どのような姿ですか。)のように質問をした理由として適切なものを選択する		69.8	-4.2
3	寺田さんと山本さんが、どのような思いでボランティアを続けているのかについて、分かったことをまとめて書く	目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる	56.7	-13.5

児童質問紙では、「国語の授業で、立場や考えの違いを意識して話し合い、自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめていますか」の質問に対し、「当てはまる」という回答が約28%にとどまり、「どちらかと言えば当てはまる」という回答が約46%と約半数を占めている。今後は、国語の授業を基本としながら、様々な教科の学習活動を通して、**積極的に立場や考えの違いを意識して話し合い、自分とは違う意見を生かして自分の考えをまとめるなどの学習活動をより一層充実させることが重要**であると考えられる。

③算数について

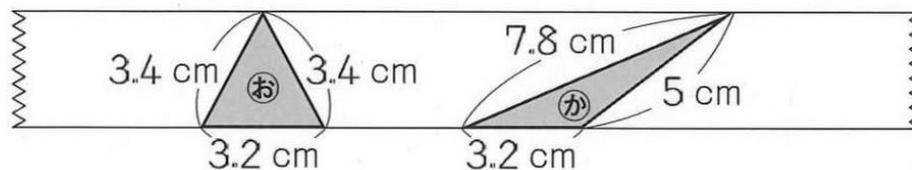
令和4年度の調査では、図形領域において5ポイント以上差が見られたことから、小学校算数の図形領域の向上を課題に挙げた。**今年度は、「図形」の領域で全国平均との差を縮めた。**

<小学校算数領域別の全国平均正答率との差> (単位は%)

領 域	令和4年度	令和5年度
数と計算	-3.2	-3.9
図形	-5.1	-2.5
変化と関係	-2.9	-2.2
データの活用	-2.8	-3.1

しかし、図形の問題は、他の領域に比べ全国平均正答率も低い。特に全国的にも正答率が低かった問題は次のような問題である。小田原市でも約2割の正答率であった。

問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
テープを直線で切ってできた二つの三角形の面積の大小について分かることを選び、選んだわけを書く	高さが等しい三角形について、底辺と面積の関係を基に面積の大小を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる	18.2	-2.6



- 1 ③の面積の方が大きい 2 ④の面積の方が大きい 3 ③と④の面積は等しい
 4 ③と④の面積はこのままでは比べることができない

小田原市では4の解答が全国と比べて多かったが、これは具体的な高さの数字がないことから、「比べられない」「説明できない」と判断したためと考えられる。

また、4つの領域のうち、全国平均正答率との差が一番大きいのは「数と計算」の領域である。「数と計算」の問題別正答率を見ると、全国平均正答率との差が特に大きいのは次の問題である。

<小学校算数「数と計算」の問題と正答率> (単位は%)

問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
$(151 + 49) \times 3$ と $151 \times 3 + 49 \times 3$ を計算したり、分配法則を用いたりして答えを求める	加法と乗法の混合した整数の計算をしたり、分配法則を用いたりすることができるかどうかをみる	66.5	-5.9

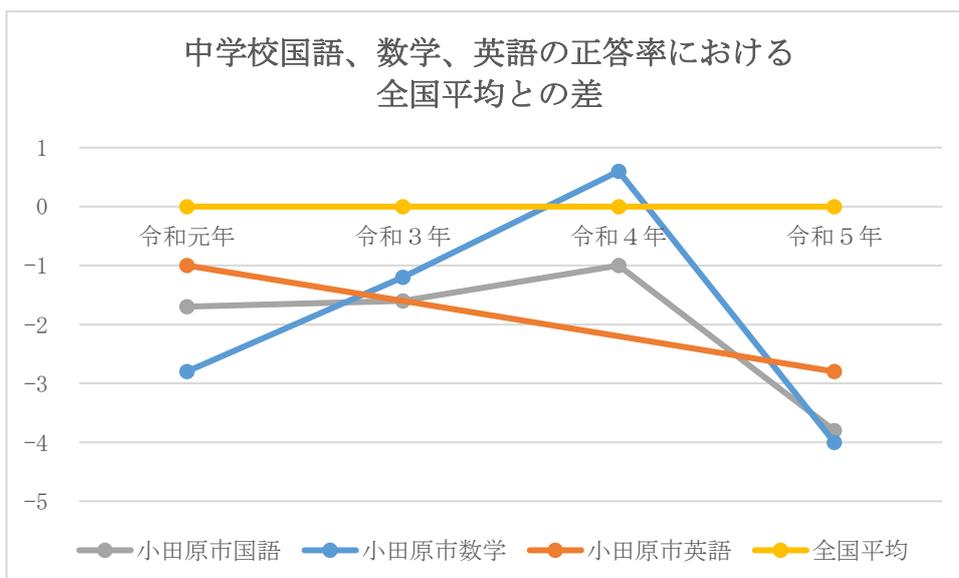
この問題は、学習指導要領第4学年の「数と計算」の内容「四則の混合した式について理解し、正しく計算すること」「四則に関して成り立つ性質についての理解を深めること」にあてはまる内容である。この問題の解答類型をみると、小田原市の児童の場合、① $(151 + 49) \times 3$ は正しく計算できるものの、② $151 \times 3 + 49 \times 3$ が正しく計算できないかもしくは、②が①と同じ答えになることを理解していない傾向が強い。

算数の学習では、**表された式と場面を関連付けて読み取ることが大切にする**と同時に、計算の順序やその性質について理解し、繰り返し計算に習熟したり、計算を工夫したりすることができるようになることが重要である。一人ひとりの問題を解く速さや難易度に合わせ、その子にとって最適な問題をより多く解くことができるような指導方法の工夫も必要である。



(3) 教科に関する調査について【中学校】

①直近4回の平均正答率の経年変化



中学校調査では、各教科で**全国平均との差が広がったものの、平均正答率の±5%の範囲内であり、大きな差は見られない。**

②国語について

< 中学校国語区分別の全国平均正答率との差 > (単位は%)

分類	区分	小田原市正答率	全国との差	
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	63.8	-3.7
		(2) 情報の扱い方に関する事項	60.0	-3.4
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	68.3	-6.4
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	78.7	-3.5
		B 書くこと	59.8	-3.4
		C 読むこと	60.4	-3.3

中学校国語の区分別の全国平均正答率との差を見ると、概ねどの区分も3.5ポイント程度の差である。「書くこと」について全国平均との差を前年度(-3.8)と比較すると、徐々に差が縮まっている。一方、知識及び技能の「(3) 我が国の言語文化に関する事項」については、全国平均正答率と5ポイント以上の差があり、前年度(-0.2)と比較すると大きく差が開いている。

さらに、問題別にみると、特に大きな差になっているのが歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す問題である。



	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国 との差
1	自分がこれからどのように本を読んでいきたいかについて、読んだ文章を参考にして、知識や経験に触れながら書く	文章を読んで理解したことなどを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができるかどうかをみる	64.1	-3.4
2	歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す（いひける）	歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直して読むことができるかどうかをみる	71.2	-11.3
3	原文の中の語句に対応する言葉を現代語で書かれた文章から抜き出す（いと）	古典の原文と現代語の文章とを対応させて内容を捉えることができるかどうかをみる	69.4	-4.7

「歴史的仮名遣い」「現代仮名遣い」の違いを正しく理解できていないことが分かる。古典の世界に親しむことは、小学校高学年から継続的に各学年の学習内容に位置づいている。小学校段階で行われる読み聞かせや音読、暗唱などの伝統的な言語文化に関する学習を踏まえ、中学校段階においても、古典特有のリズムに親しみながら生徒が音読し、古典に親しむよう学習指導要領にも記載されている。活字を目で追う音読は、中学1年で学習する歴史的仮名遣いを現代仮名遣いで読むことになるので、**新しく学ぶ古典教材を都度音読し、教材に即した「文語のきまり」を意識する機会を設ける必要がある。**

③数学について

＜中学校数学領域別の全国平均正答率との差＞（単位は％）

領 域	小田原市	全国との差
数と式	60.1	-2.9
図形	28.4	-4.8
関数	46.6	-4.6
データの活用	44.4	-4.1

全国的にも平均正答率が低い「図形」の領域が、小田原市においても小学校同様正答率が低い結果となっている。平均正答率が約3割となった。

問題別にみると、特に大きな差になっているのが、図形問題の1問目と2問目の問題である。1問目は空間図形の知識及び技能を問う問題、2問目は平面図形の思考力、判断力、表現力等を問う問題である。

	問題の概要	出題の趣旨	小田原市 正答率	全国と の差
1	空間における平面が1つに決まる場合について、正しい記述を選ぶ	空間における平面が同一直線上にない3点で決定されることを理解しているかどうかをみる	24.0	-6.4

2	2つの直線BCと直線AEが平行であることを、三角形の合同を基にして、同位角又は錯角が等しいことを示すことで証明する	ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明することができるかどうかをみる	26.4	-5.7
3	二等辺三角形でない2つの合同な三角形のときに平行線がかけないことについて、二等辺三角形のときの証明の中から成り立たなくなる式を書く	条件を変えた場合に事柄が成り立たなくなった理由を、証明を振り返って読み取ることができるかどうかをみる	34.9	-2.1

< 1 の問題 >

空間における平面が1つに決まる場合について正しく述べたものを、下のアからエまでの中から1つ選びなさい。 ア 1点をふくむ平面は1つに決まる。 イ 2点をふくむ平面は1つに決まる。 ウ 1つの直線上にある3点をふくむ平面は1つに決まる。 エ 1つの直線上にない3点をふくむ平面は1つに決まる。	小田原市 解答類型別正答率
	ア 8.5
	イ 29.9
	ウ 36.0
	エ 24.0 ◎

(単位は%)

この問題は中学校1年生で学習する「空間における直線や平面の位置関係を知ること」の内容である。図形の問題でありながら、言葉のみで問われている問題であり、問題文の言葉から、空間にできる平面を具体的にイメージして答える必要がある。解答類型から見ると、イやウの解答率が正答であるエの解答率を上回る結果となっている。

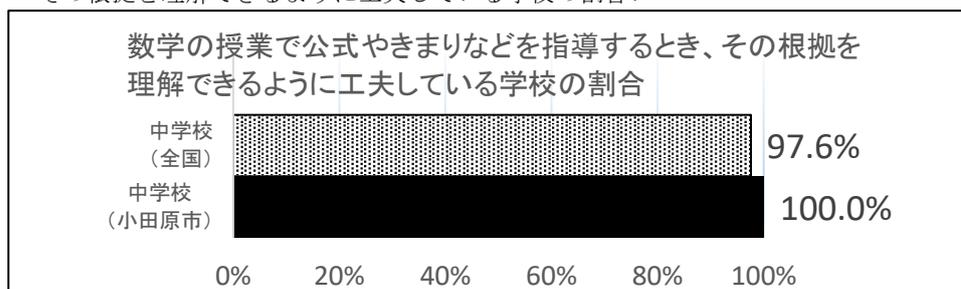
空間図形など、図形をイメージする力を養うためには、**授業で具体物を操作しながら図形の性質を見出すなどの学習活動を充実させることで、図形の性質や関係について理解を深めていくことが必要である。**また、繰り返しの作図や、空間図形を平面に表すことに困難さがある時には、ICTを使用した3D映像などで補うことも有効である。

<p>(1) 優奈さんは、前ページの方法1の直線BCと直線AEが平行になるかどうかを調べるために、右の図6をかきました。図6の△ABCと△CEAは、それぞれCA = CB、AC = AEで、△ABC ≅ △CEAです。</p> <p>図6において、BC // AEであることは、すでにわかっている△ABC ≅ △CEAをもとにして、同位角または錯角が等しいことを示すことで証明できます。BC // AEであることを証明しなさい。</p>	<p>図6</p>
<p>(正答例) △ABC ≅ △CEAより、合同な図形の対応する角は等しいから、 ∠BCA = ∠EAC よって、錯角が等しいから、BC // AE</p>	

この問題は中学校2年生で学習する「基本的な平面図形の性質を見だし、平行線や角の性質を基にしてそれらを確認説明すること」の内容である。正答率の26.4%を無回答率26.9%が上回っている。

図形の性質を、角や平行線の性質を基にして説明することを通して、根拠や理由を明らかにしながら事象に対する解釈や理解を確かなものにする論理的思考力を養うことが、数学で証明を学習することの意味である。学校質問紙では、「数学の授業で公式やきまりなどを指導するとき、生徒がその根拠を理解できるように工夫している学校の割合」は100%という結果であるが、互いに根拠を明らかにして話し合うことで、**生徒自身が理解を深められてよかった、納得できてよかったと思えるような授業展開のさらなる工夫**が必要である。

<数学の授業で公式やきまりなどを指導するとき、生徒がその根拠を理解できるように工夫している学校の割合>



学校質問紙調査より

④英語について

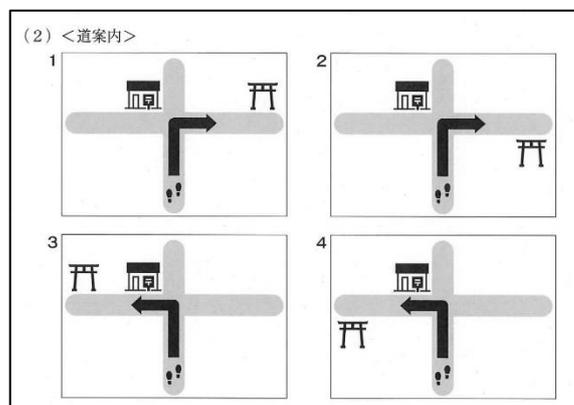
<中学校英語領域別の全国平均正答率との差> (単位は%)

領域	小田原市	全国との差
聞くこと	52.9	-5.5
読むこと	49.6	-1.6
話すこと (やり取り)	10.8	-3.7
話すこと (発表)	2.9	-1.3
書くこと	21.5	-1.9

領域別の平均正答率を見ると、全国平均正答率との差が大きいのは「聞くこと」である。また、正答率の低さが見られるのは「話すこと」の領域である。

「聞くこと」の領域の問題をみると、6問あるうち正答率に11ポイント以上差があるものが次のような問題である。(音声スクリプト)

A: Excuse me. Can you tell me the way to the shrine?
 B: Sure. Go straight and walk for about five minutes. When you see the post office, turn right. Keep walking, and the shrine is on your left.
 A: I see. Thank you. (音声)



(選択肢)

	小田原市 解答類型別正答率
1	52.7 ◎
2	12.0
3	16.2
4	18.9
無回答	0.2

(単位は%)

この問題は、「道案内」の場面から、必要な情報は何かを判断し、聞き取ることができるかをみる問題である。解答類型を見ると、無回答率は0.2%と少ないものの、2・3・4と回答が分散されており、「right」「left」「shrine」などの道案内の状況に必要な語句を聞き取ることに課題があることがわかる。

目的に応じて英語を聞き、必要な情報を聞き取ることができるようにするためには、授業の中で様々な場面設定をしながら、**その場面でどんな情報が必要であるかを生徒自身が考え、それに関連する語句や表現を予想し、着目できるようにすることが大切である。**

また「話すこと」の領域の問題は5問あり、全ての問題について正答率より無回答率が上回る。これらの問題は、やり取りの場面で、①即興で伝え合うことができるか②考えとその理由を述べ合うことができるか、の2点をみる問題である。

問題 番号	小田原市 正答率	小田原市 無回答率
1	11.8	20.9
2	6.8	15.7
3	9.3	18.3
4	15.2	16.4
5	2.9	18.0

(単位は%)

<「話すこと」の問題例>

(2) I was so excited to see the baby elephant. So, what are we going to do next?
(解答時間 7秒)

生徒質問紙では、「話すこと」の問題に対してどのように解答したかを聞いており、次のような結果が出ている。

<『話すこと』の問題に対してどのように解答しましたか』についての回答別割合>

	回答内容	小田原市
1	聞いたことを理解し、話す内容もその内容を表現する英語も思い浮かんだ	4.8
2	聞いたことを理解し、話す内容は思い浮かんだが、その内容を表現する英語が思い浮かばなかった	38.9
3	聞いたことは理解したが、話す内容が思い浮かばなかった	39.2
4	聞いたことを理解できなかった	17.1

生徒質問紙より (単位は%)

多くの生徒が、話したい内容が英語で表現できなかつたり、話す内容が思い浮かばなかつたりしている現状から、原稿を書いて覚えたり、事前に何を伝えるか考えておいたりする**準備時間**を取ることなく、**相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合う指導が必要**である。語句や表現方法を身につけることと同時に、生徒が、自分の考えや気持ちを英語で伝え合うような場면을継続的・計画的に取り入れていくことが重要である。

4 質問紙に関する調査結果

質問紙調査については、(1) 教育活動の取組状況に関わる項目 (2) 教育環境に関わる項目の2点で整理をしていく。これらの質問は、クロス集計により教科に関する調査と相関関係のあることがわかっている質問紙調査の項目であり、その一部を全国の状況と比べながら分析した。これらの項目についてできるだけ肯定的な回答をする児童生徒を増やしていくことが、教科の調査結果の向上にもつながると考える。

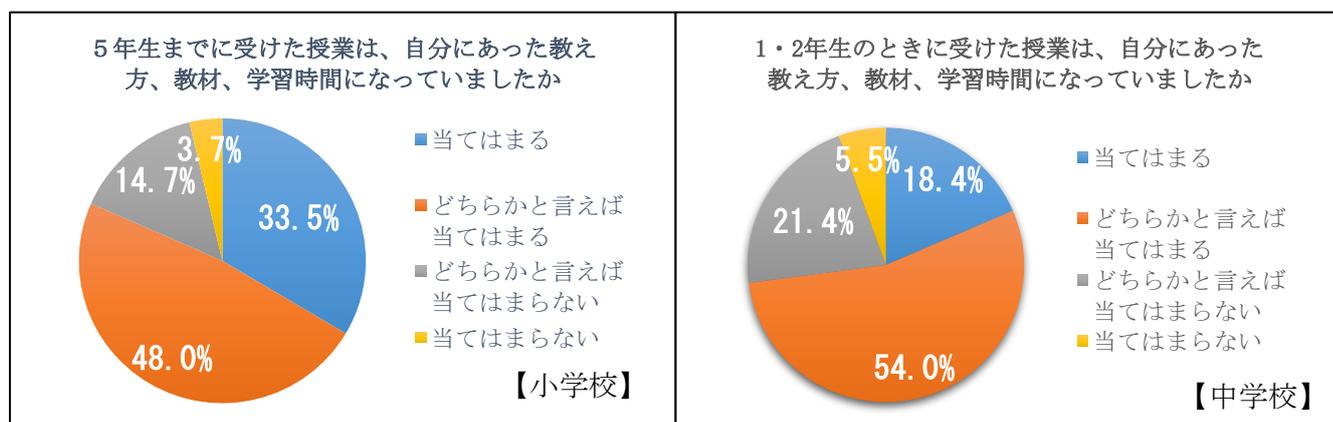
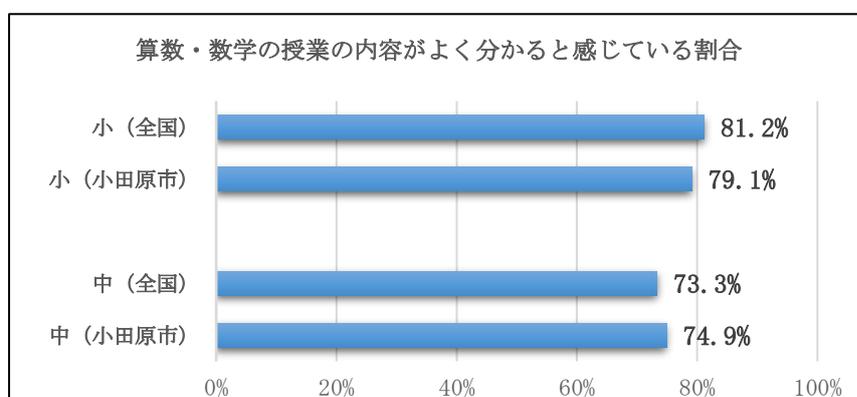
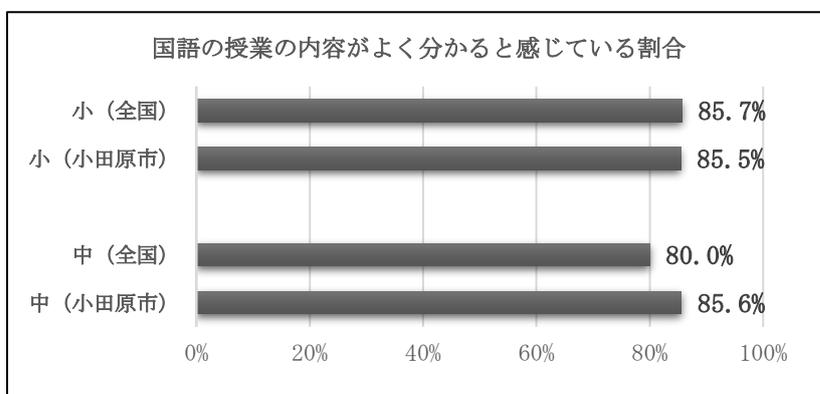
(1) 教育活動の取組状況に関わる項目について

【項目1】「国語の授業内容がよく分かる」

【項目2】「算数・数学の授業内容がよく分かる」

※小学校、中学校ともに「国語（算数・数学）の授業内容はよく分かりますか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答をした児童生徒の割合

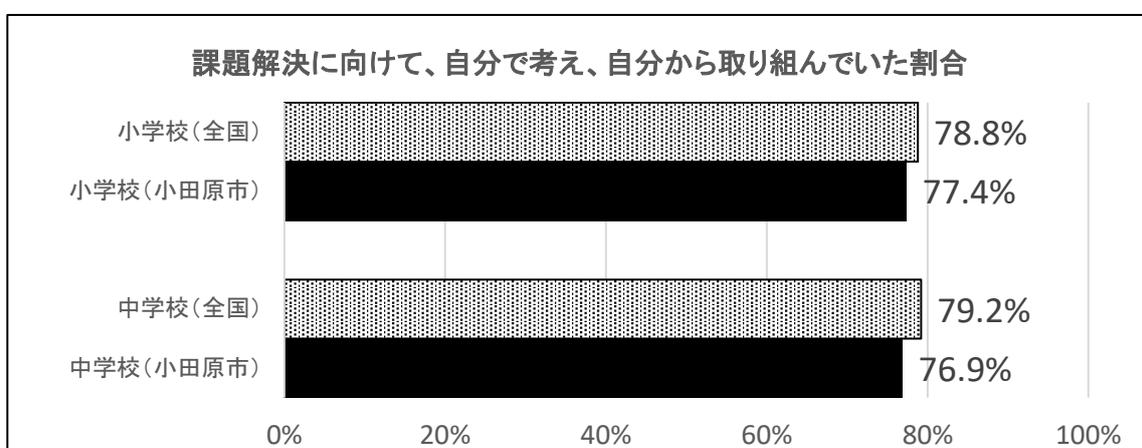
【項目3】前の学年までに受けた授業は、自分に合った教え方、教材、学習時間などになっていた



国語、算数・数学ともに、授業の内容がよく分かると回答した割合は、小学校では若干全国平均には及ばないが、中学校では全国平均を上回り、国語においては5ポイント以上上回っている。児童生徒が、自分の理解を確かめながら学習を進めていくことは、学習内容の定着にもつながっていく。**理解の度合やスピードは一人ひとり異なるが、教え方、教材、学習時間の設定について、それぞれが最適であると感じられるようさらに工夫をしていく必要がある。**

【項目4】「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた」

※小学校、中学校ともに「前学年までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問事項で「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的な回答した児童生徒の割合

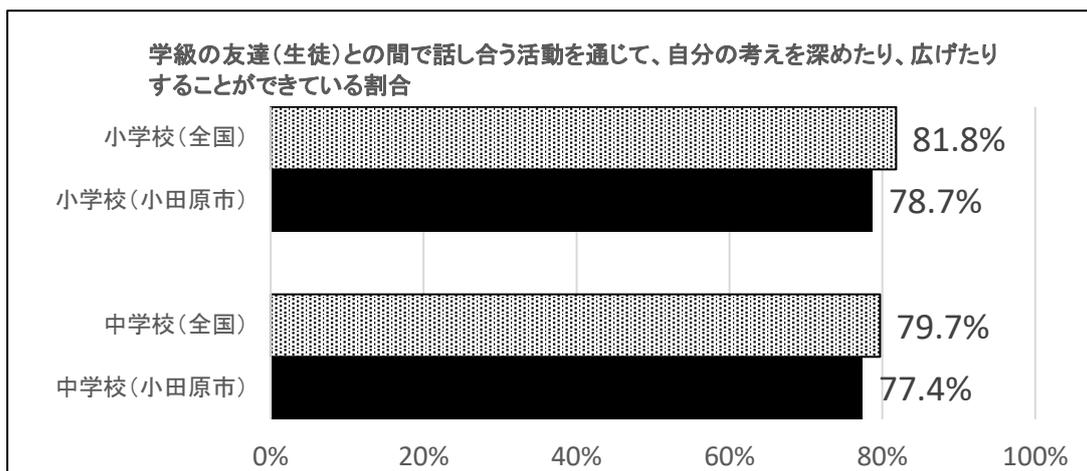


課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組もうとする児童生徒の割合は全国平均をやや下回る結果であった。肯定的な回答をした児童生徒ほど各教科の平均正答率が高い傾向であることが明らかになっており、自分の考えをもち、主体的に課題に取り組むことは大変重要である。また、今年度の文部科学省のクロス分析にも、課題の解決に向けて自分から取り組む児童生徒ほど、「自分にはよいところがあると思う」と自己肯定感が高い傾向にあることが明らかである。今後も、学習指導要領の趣旨を踏まえ、与えられた課題に取り組むだけでなく、**児童生徒一人ひとりが興味関心を高めて問いをもち、その解決に向けて知識や技能を活用し、学びを深めていくことが大切である。**

【項目5】「学級の友達(生徒)との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」

※「学級の友達(生徒)との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか」という質問事項に対し、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒の割合



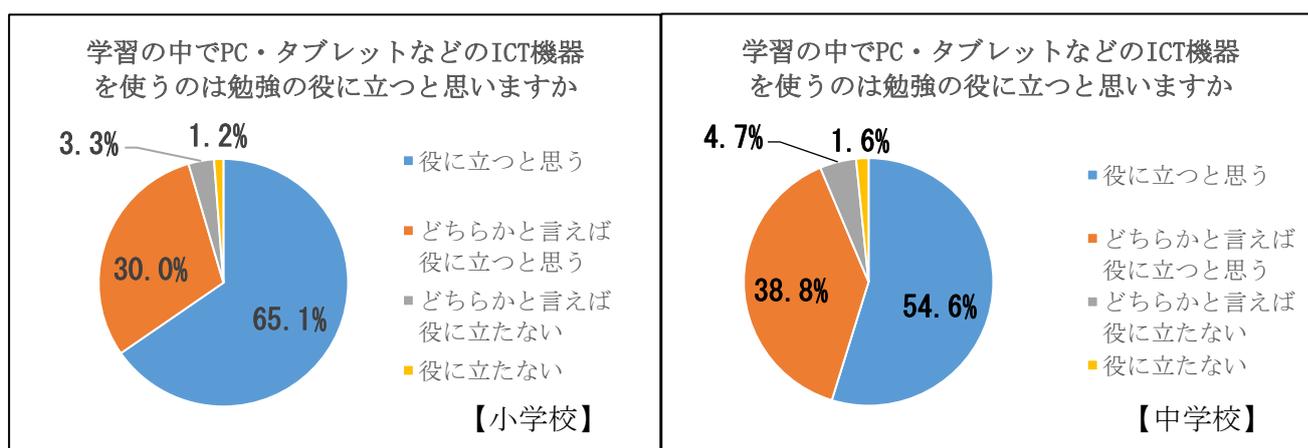


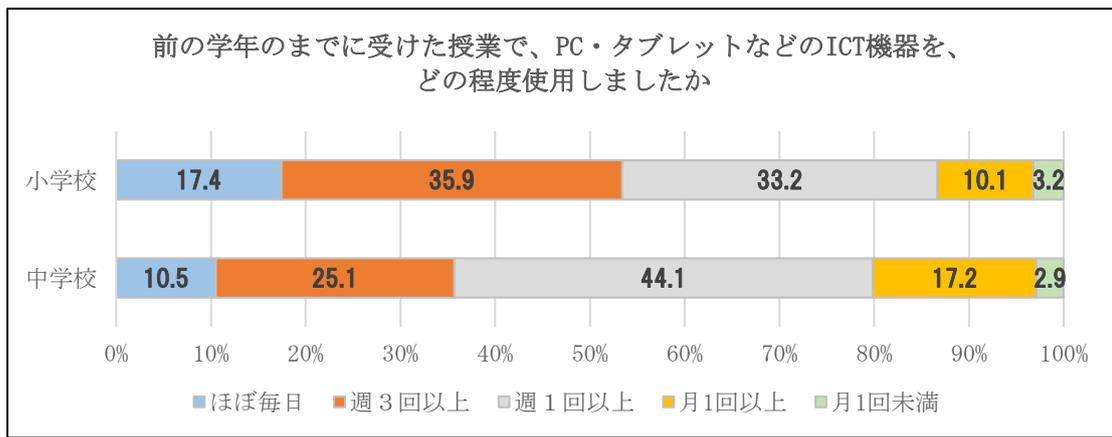
主体的・対話的で深い学びの実現に向け、各学校で授業研究などの取組が行われているが、児童生徒自身も、学習活動の中で行う対話の良さを実感していると考えられる。文部科学省の今年度の分析でも、この項目に肯定的な回答をしているほど、「自分と違う意見について考えるのは楽しいと感じる」ことが明らかになっている。**友達や他の生徒の思いや考えと出会うことによって、自分の考えが変わったり、よりよいものを生み出したりといった経験をさらに積み重ねられるようにしていくことが望まれる。**そのためにも、温かく互いを認め合う学習集団の形成が不可欠である。

(2) 教育環境に関わる項目について

【項目1】「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」

【項目2】「前の学年までに受けた授業で、PC・タブレットなどのICT機器を、どの程度使用しましたか」



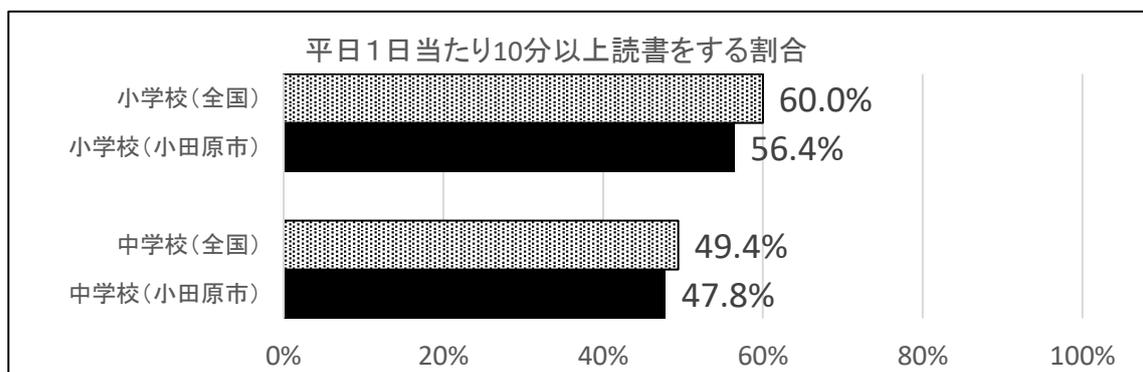


学習場面における ICT 機器の有用性について、約 9 割程度の児童生徒が「役に立つ」「どちらかと言えば役に立つと思う」と感じている。一方、前年度までの授業で週 3 回以上は使用していたのは、中学校で約 4 割、小学校で約 5 割にとどまっている現状がある。

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善が進んでいるほど、各教科の正答率が高く、ICT 機器の利用頻度も多くなる傾向があることが文部科学省の分析から明らかである。今後も、主体的・対話的で深い学びを授業で実施ししていく中で、**児童生徒が自分の学習の道具として ICT 機器を自由に活用できるような場面を意識的に設定することが大切である。**

【項目 3】「1 日当たり 10 分以上読書をしている」

※「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1 日当たりどれくらいの時間、読書を読みますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く。電子書籍含む）」の質問事項に対し「1 日当たり 10 分以上読書をしている」と回答した児童生徒の割合



日常的に本に親しむことは、国語の学力の向上につながるともに、様々な世界や考え方に触れることにつながる。教科書の文章をじっくり読み、学習を深めていくことと並行して、様々な読み物との出会いを大切にしていきたい。

今年度から本質問項目に「電子書籍を含む」という文言が加わったとおり、児童生徒を取り囲む読書環境も広がりを見せている。本市でも「小田原市電子図書館」に全ての児童生徒の学習用端末からアクセスできるようにしたところである。**児童生徒が進んで本に親しめるよう、様々な読書環境を整えたり、声かけをしたりしていくことが重要**である。

